

# 五浦論叢

---

茨城大学五浦美術文化研究所紀要

第 30 号

2023

---

# 五浦論叢

THE IZURA BULLETIN

## 茨城大学五浦美術文化研究所紀要

第 30 号

2023

### 目次

【論文】	「伴大納言絵」の人物に関する一考察……………須賀 みほ	27
	「常陸名所図屏風」の景観表現——先行図様利用の視点から——……………猪岡 萌菜	1
	旧岡倉覚三（天心）邸書斎障壁画について……………	
	——茨城県天心記念五浦美術館と荒井経との共同による復元事業報告——……………塩田 釈雄	51
【報告】	宮川寅雄の近代美術史……………宮田 徹也	117
	美術品の保存修復の理念——西洋絵画を中心として——……………鳥海 秀実	73
【特集・美術史家ジュリオ・カルロ・アルガンの思想と方法】（3）		
	「イタリア美術史」( <i>Storia dell'arte italiana, 1968-1994</i> ) (1)……………ジュリオ・カルロ・アルガン	139
	ローマ中央修復研究所の創設——その歴史と意義……………上田 恒夫／森田 義之・小林もり子	199
	……………ジュリオ・カルロ・アルガン、マリオ・セーリオ	
	……………森田 義之・鳥海 秀実	
【翻訳】	エリー・フォール——生涯、美術史、文明批評 (3)……………ポール・デザンジュ	215
	アレックスサンドロ・フランキ……………吉野 斉志・上田あゆみ	249
	……………カルロ・デル・ブラーヴォ	
	……………訳・解題 甲斐 教行	
【所員紹介】	研究所規程、研究所組織、所員紹介、客員所員紹介……………片口 直樹	
	二〇二二年度活動報告……………	
	茨城大学五浦美術文化研究所所員企画展二〇二二……………齋木 久美	
	つなぐ人つなぐ文—手紙に「見る」そのひとらしさ—報告……………	
	茨城大学人文社会科学部地域史シンポジウム……………田中 裕	
	「北関東の豪族たちⅡ—「長者」たちの萌芽と基盤—」を開催して……………	
	投稿規定、執筆要領……………	

題字 川又南岳

## 『五浦論叢』刊行委員会

- 一、本委員会は、開かれた人文系学術誌（美術史・歴史・文学等）としての『五浦論叢』の内容の充実と発展をはかるために設置する。
- 二、本委員会委員は、『五浦論叢』の趣旨にふさわしい内容と水準の論文を広く研究者の中から募集し、査読し、校閲する。
- 三、本委員会委員は、研究所所員および客員所員の中から、所長が委嘱する。

### 運営委員（○は所長）

- 片口 直樹（本学教育学部准教授）  
小林 英美（本学教育学部教授）  
齋木 久美（本学教育学部教授）  
澁谷 浩一（本学人文社会科学部教授）  
添田 仁（本学人文社会科学部教授）  
藤原 貞朗（本学人文社会科学部教授）

### 客員所員

- 金子 一夫（本学教育学部名誉教授）  
川又 正（元本学教育学部教授）  
小泉 晋弥（本学教育学部名誉教授）  
佐々木寛司（本学人文社会科学部名誉教授）  
佐藤 道信（東京藝術大学教授）  
鈴木 暎一（本学教育学部名誉教授）  
鶴間 和幸（学習院大学教授）  
中村 愿（蘭花堂主人）  
森田 義之（愛知県立芸術大学名誉教授）

### 『五浦論叢』編纂委員（○は委員長）

- 所 員 ○小林 英美（本学教育学部教授）  
甲斐 教行（本学教育学部教授）  
添田 仁（本学人文社会科学部教授）  
田中 裕（本学人文社会科学部教授）

研 究 所 規 程  
研 究 所 組 織  
所 員 紹 介  
客 員 所 員 紹 介

## ○茨城大学五浦美術文化研究所規程

(平成二十七年三月二日規程第一三四号)

改正

- 平成二十二年四月一日制定第三八号
- 平成二十三年九月二一日規則第六三号
- 平成二十四年九月二〇日規則第六六号
- 平成二十七年三月二六日規則第三一号
- 平成二十七年三月二一日規則第五五号
- 平成二十七年八月三一日規則第一七五号
- 平成二十九年三月二八日規則第八号
- 平成三十一年三月二三日規則第三三三号
- 令和元年七月二日規則第八号
- 令和五年三月一六日規則第一九号
- 令和五年三月三二日規則第五号

### (趣旨)

第一条 この規程は、国立大学法人茨城大学組織規則(平成一六年規則第一号)第二六条第二項の規定に基づき、茨城大学五浦美術文化研究所(以下「研究所」という。)に関し必要な事項を定める。

### (目的)

第二条 研究所は、思想、歴史、美術批評、文学、文化財政等に優れた業績を残した国際的知識人である岡倉天心に関する調査・研究及び諸領域に関する研究を広く行うとともに、天心の遺蹟・遺品の維持保存に努め、地域の歴史・文化と教育の向上に貢献する学術的調査・研究を行い、その成果を提供することにより、地域に寄与することを目的とする。

### (事業)

第三条 研究所は、第二条の目的を達成するため、次に掲げる事業を行う。

#### (一) 調査・研究及び出版

(二) 施設の維持・保存及び各種資料の収集・保管

(三) 教育・地域貢献に対する協力

(四) 講演会、展示会等の開催

(五) その他目的達成に必要な事項

### (職員)

第四条 研究所に、次の職員を置く。

- (一) 所長 一人
- (二) 副所長 一人

(三) 所員 二〇人程度

二 前項のほか、事務職員を置くことができる。

### (所長)

第五条 所長は、所務を統轄し研究所を代表する。

### (副所長)

第五条の二 副所長は、所長を補佐するとともに、所長に事故があるときは、その職務を代行する。

二 副所長の任期は、二年以内とし、再任を妨げない。ただし、欠員により補充された者の任期は、前任者の残任期間とする。

### (所員)

第五条の三 所員は、所務に従事する。

二 所員の任期は、二年以内とし、再任を妨げない。ただし、欠員により補充された者の任期は、前任者の残任期間とする。

### (所長の任命)

第五条の四 所長の任命については、図書館長及び全学共同利用施設長の任命に関する取扱いについて(平成三二年一月二一日学長決定)に定める。

### (副所長の任命)

第五条の五 副所長は、所長が指名し、学長が任命する。

### (所員の任命)

第五条の六 所員は、茨城大学の教員のうちから第八条に定める運営委員会の

審議を経て、所長が任命する。

(事務職員)

第五条の七 事務職員は、建物の維持管理等の事務を処理する。

(顧問)

第六条 研究所が実施する調査・研究に対する協力を得るため、並びに施設の維持・保存及び各種資料の収集・保管についての必要な意見を聴くため、研究所に顧問若干人を置くことができる。

二 顧問は、第九条に定める運営委員会の審議を経て、所長が委嘱する。

三 顧問の任期は、所長がその都度定める。

(客員所員)

第七条 研究所に、所員との共同研究・地域社会との協力を促進するため、客員所員を若干人置くことができるものとし、他の研究機関等の研究者をもつて充てる。

二 客員所員は、第一三条に定める所員会議の審議を経て、学長が委嘱する。

三 客員所員の任期は、二年以内とし、再任を妨げない。

(運営委員会)

第八条 本学に、研究所の施設・設備の整備計画その他重要事項を審議するため、茨城大学五浦美術文化研究所運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

(運営委員会の審議事項)

第九条 運営委員会は、次に掲げる事項を審議する。

(一) 研究所の管理及び運営の基本方針等に関する事項

(二) 所員の選出に関する事

(三) 研究所の予算に関する事

(四) 施設の維持・管理及び設備の整備計画に関する事

(五) 研究所の点検・評価に関する事

(六) その他前各号に付随する重要事項

(運営委員会の組織)

第一〇条 運営委員会は、次に掲げる者をもって組織する。

(一) 所長

(二) 副所長

(三) 所員から選出された者 若干人

(四) 研究・社会連携部長

(五) 社会連携課長

二 前項第三号に掲げる委員は、所長の推薦に基づき、学長が任命する。

三 第一項第三号に掲げる委員の任期は、二年以内とし、再任を妨げない。ただし、欠員により補充された委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(運営委員会の委員長)

第一一条 運営委員会に委員長を置き、所長をもって充てる。

(運営委員会の会議)

第一二条 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

二 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長の指名する委員が、その職務を代行する。

三 運営委員会は、委員の三分の二以上の出席がなければ会議を開くことができない。

四 議事は、出席委員の過半数をもって決し、可決同数のときは、議長の決するところによる。

五 委員長が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求めて、その意見を聴くことができる。

(所員会議)

第一三条 研究所に、所員会議を置く。

二 所員会議は、第四条第一項第一号から第三号までに掲げる者及び社会連携課長をもって組織する。

三 所員会議は、第二条に掲げる目的を達成するために必要な事項を審議す

る。

四 所員会議の議長は、所長をもって充てる。

五 議長は、所員会議を招集する。

六 議長に事故があるときは、副所長がその職務を代行する。

七 所員会議は、所員の三分の二以上の出席がなければ会議を開くことができない。

八 議事は、出席所員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

九 議長が必要と認めるときは、所員会議の構成員以外の者の出席を求めて、その意見を聴くことができる。

(各委員会)

第一四条 研究所に、第三条に規定する事業を行うため、必要に応じて委員会を置くことができる。

二 所員は、各委員会のいずれかに所属するものとする。

三 各委員会に関し必要な事項は、別に定める。

(事務等)

第一五条 研究所に関する事務は、研究・社会連携部社会連携課において処理する。

(雑則)

第一六条 この規程に定めるもののほか、研究所に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規則は、昭和三八年八月一日から施行する。

附 則

この規則の改正は、昭和三九年六月二五日から施行する。

附 則

この規則は、昭和四五年一二月二四日から施行する。

附 則

この規則は、昭和四七年六月一五日から施行する。

附 則

この規則は、昭和四九年六月二五日から施行する。

附 則

この規則は、平成八年四月一日から施行する。

附 則

この規則は、国立大学法人茨城大学設立に伴う茨城大学学内規則等の整備に関する規則(平成一六年規則第一九号)の施行の日(平成一六年六月二四日)から施行し、平成一六年四月一日から適用する。

附 則(平成二二年四月一日制定第三八号)

この規則は、国立大学法人茨城大学組織規則の改正及び事務組織改革に伴う学内規則等の整備に関する規則(平成二二年規則第三八号)の施行の日(平成二二年四月一日)から施行する。

附 則(平成二三年九月二一日規則第六三号)

一 この規則は、平成二三年九月二一日から施行する。ただし、改正後の第

一〇条から第一六条までの規定は、平成二三年四月一日から適用する。

二 茨城大学五浦美術文化研究所運営委員会規則は、廃止する。

三 この規則施行の日の前日において、所長又は副所長であった者は、改正後の第五条第六項及び第七項の規定により選出されたものとみなし、その任期は、第六条第一項の規定にかかわらず、平成二四年三月三一日までとする。

四 この規則施行の日に所員である者は、第六条第一項の規定にかかわらず、改正前の任期を引き継ぐものとする。

附 則(平成二四年九月二〇日規則第六六号)

この規則は、平成二四年九月二〇日から施行する。

附 則(平成二七年三月二六日規則第三一号)

この規則は、平成二七年三月二六日から施行する。

この規則は、国立大学法人茨城大学における学校教育法及び国立大学法人法等の一部改正に伴う学内規則等の整備に関する規則（平成二十七年規則第三一号）の施行の日（平成二十七年四月一日）から施行する。

附 則（平成二十七年三月三十一日規則第五五号）

この規程は、国立大学法人茨城大学における規則等の体系化及び名称変更に伴う学内規則等の整備に関する規則（平成二十七年規則第五五号）の施行の日（平成二十七年四月一日）から施行する。

附 則（平成二十七年八月三十一日規則第一七五号）

一 この規程は、平成二十七年八月三十一日から施行し、平成二十七年四月一日から適用する。

二 この規程の施行の際現に客員所員である者の任期は、第八条第三項の規定にかかわらず、平成二十八年三月三十一日までとする。

附 則（平成二十九年三月二十八日規則第八号）

この規則は、平成二十九年三月二十八日から施行し、平成二十八年四月一日から適用する。

附 則（平成三十二年三月三十一日規程第二三三号）

この規程は、平成三十二年三月三十一日から施行し、平成三十二年一月二日から適用する。

附 則（令和元年七月二日規則第八号）

この規則は、令和元年七月二日から施行し、平成三十二年四月一日から適用する。

附 則（令和五年三月一六日規程第一九号）

この規程は、令和五年四月一日から施行する。

附 則（令和五年三月三十一日規則第五号）

この規則は、令和五年四月一日から施行する。



【研究所組織】

(令和五年四月一日現在 氏名は五十音順)

所長 片口 直樹

副所長 藤原 貞朗

【所員】

池庄司規江

猪俣 紀子

甲斐 教行

片口 直樹

神田 大吾

小林 英美

齋木 久美

佐々木 啓

佐藤 環

澁谷 浩一

清水恵美子

添田 仁

高橋 修

田中 裕

千葉真由美

西野由希子

藤原 貞朗

堀口 育男

【客員所員】

網谷 厚子

金子 一夫

小泉 晋弥

後藤 道雄

佐々木寛司

佐藤 道信

菅谷 務

鈴木 暎一

鶴間 和幸

中村 愿

深澤 安博

藤本 陽子

森田 義之

(五十音順)

## 【所員紹介】

池庄司 規江（いけしやうじ のりえ） 教育学部准教授

昭和四八年（一九七三）／筑波大学大学院地球科学研究科修士／博士（理学）  
／地誌学

・（共）宮崎尚子・大島聖美・大島規江「島崎藤村『夜明け前』の国文学的考察―乖離する表象としての青山半蔵―」（『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）』、七一号、二〇二二年、一一―一二頁）

・（共）大島規江・宮崎尚子・大島聖美「島崎藤村『夜明け前』の地理学的考察―近世類落期における木曾の庄屋―」（『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）』、七一号、二〇二二年、一三一―二六頁）

・（共）大島聖美・大島規江・宮崎尚子「島崎藤村『夜明け前』の心理学的考察―藤村の家族関係と生涯―」（『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）』、七一号、二〇二二年、一七九―一九一頁）

・（単）大島規江「ヨーロッパにおける地域言語―オランダのフリジア語を中心に―」（『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）』、七一号、二〇二二年、二七―三八頁）

・（単）池庄司規江「地域言語と教育言語―オランダ・フリースラント州の初等教育における教育言語―」（二〇二二年度日本地理学会秋季学術大会要旨集、一〇二二号、二〇二二年、五六頁）

・（単）池庄司規江「オランダ統治下のフォルモサ研究に関する覚書―台湾有史時代のはじめに関する学際的研究に向けて―」（『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）』、七二五号、二〇二三年、九―二〇頁）

猪俣 紀子（いのまた のりこ） 人文社会科学部准教授

昭和五十一年（一九七六）／大阪府立大学人間文化学専攻比較文化専攻博士後期課程退学／修士（学術）／マンガ

・「マンガとバンドデシネにおける笑いの違い」（『KOKO』, Eventhia Moreau, 二〇二二年、一一二―一二七頁）

・「世界のアニメ&マンガに夢中」（『English Journal Online』、二〇二二年）  
・「漫画この一年」（『東京新聞』、二〇二二年十二月二十三日）

・「フランスにおけるバンドデシネ研究史」（『びらんじ』、五〇号、二〇二二年、三四―四五頁）  
・「漫画この一年」（『東京新聞』、二〇二二年十二月二十一日）

甲斐 教行（かい のりゆき） 教育学部教授

昭和三五年（一九六〇）／東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程単位取得満期退学／博士（文学）／西洋美術史

・「クリストーフ・マルチェッロ『運命について』とその典拠をめぐる考察」（単著、『五浦論叢』、二十八号、二〇二二年、二二―三八頁）  
・「知られざる巨人―彫刻家フィリップ・ドリッラの世界」（単著、『CRONACA』、一七〇号、二〇二二年、八―九頁）

・Appennino Giappone - Fotografie di Andrea Lippi, a cura di Giovanni Breschi (共著, Firenze, Casalta, 2022, pp.6-7 [Andrea Lippi, L'Appennino e il Giappone])  
・ジョルジョ・ヴァザリ『美術家列伝』第六卷（共監訳、中央公論美術出版、二〇二二年、三四七―四〇二頁）  
・「アカデミア・デル・デイセーニョ会員（1）」

・カルロ・デル・ブラーヴォ「ルイジ・サバテッリ」（単訳、『五浦論叢』、二十八号、二〇二二年、二二―三三頁）  
・カルロ・デル・ブラーヴォ「王政復古期の美術」（単訳、『五浦論叢』、二十八号、二〇二二年、一三五―一五五頁）

・カルロ・デル・ブラーヴォ「一八六〇年」（単訳、『五浦論叢』、二十九号、二〇二二年、二九七―三二九頁）

・書評・百合草真理子著『コレッジの天井画 北イタリアにおけるルネサン

術館二室、二〇一八年)

佐々木 啓 (ささき けい) 人文社会科学部准教授

昭和五三年(一九七八)／早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程退学／博士(文学)／日本近現代史

・「生きる術としての示威行動——飢餓突破川崎市労働者市民大会にみる戦時と戦後」(大門正克・長谷川貴彦編『「生きる」こと』の問い方——歴史の現場から) 日本経済評論社、二〇二二年、二二二—二五〇頁

・「書評 西成田豊著『日本の近代化と民衆意識の変容——機械工の情念と行動』」(『民衆史研究』、一〇二号、六三—七〇頁)

・「日本帝国軍の兵站と「人的資源」」(蘭信三・石原俊・一ノ瀬俊也・佐藤文香編『シリーズ 戦争と社会 第三巻 総力戦・帝国崩壊・占領』岩波書店、二〇二三年、二七一—五〇頁)

・「戦後農山村地域における新生活運動の展開——一九五〇—六〇年代の山方町諸沢地区を中心に」(『常陸大宮市史研究』、五号、二〇二三年、一一—一七頁)

・「戦時下の社会変容——抑圧か平準化か」(岩城卓二・上島享・河西秀哉・塩出浩之・谷川穰・告井幸男編『論点・日本史学』、ミネルヴァ書房、二〇二三年、三一八—三二九頁)

佐藤 環 (さとう たまき) 教育学部教授

昭和三五五年(一九六〇)／広島大学大学院教育学研究科博士課程後期単位取得満期退学／修士(教育学)／日本教育史・学校教育

・「資料とアクティブラーニングで学ぶ初等・幼児教育の原理」(監修、萌文書林、二〇二三年)

・「新たな時代の学校教育を考える」(共著、青簡舎、二〇二三年)

・「幼児の季節感を醸成する保育——幼稚園教育要領における「環境」領域を

中心として」(『茨城大学全学教職センター研究報告』二〇二二年度版、二〇二二年、一一—一七頁)

・「食事により育まれる食文化と人間関係——家庭と学校における幼児期の食事——」(『茨城大学全学教職センター研究報告』二〇二二年度版、二〇二二年、一三一—一四四頁)

・「幼児期における言葉の発達——絵本の読み聞かせに関する一考察——」(『茨城大学全学教職センター研究報告』二〇二二年度版、二〇二二年、三九—五二頁)

・「エジプトにおける日本型特別活動定着に関する一考察——学校観の相克もたらず影響を考慮して——」(『茨城大学教職実践研究』四〇号、二〇二二年、一四—一五一頁)

・「茨城県における旧制商業学校の展開」(『茨城県近現代史研究』六号、二〇二三年、七八—九三頁)

・「小学校における外国人児童への日本語指導に関する研究——水戸市立小学校の教育実践に着目して——」(共著、『茨城大学全学教職センター研究報告』二〇二二年度版、二〇二二年、二六—三七頁)

・「幼稚園における茶会の教育効果に関する一考察」(共著、『茨城大学全学教職センター研究報告』二〇二二年度版、二〇二二年、三八—四九頁)

・「初等・中等学校における職業教育の展開——戦後学制改革までの職業指導に関する一考察——」(『茨城大学全学教職センター研究報告』二〇二二年度版、二〇二三年、六一—七二頁)

・「進路の多様性に対応する商業科教育と職業教育——茨城県の商業専門高等学校を中心として——」(『茨城大学全学教職センター研究報告』二〇二二年度版、二〇二三年、九五—一〇五頁)

・「茨城大学全学教職センター研究報告」二〇二二年度版、二〇二三年、六一—七二頁)

・「書評」佐々木陽子著『戦時下女学生の軍事教練 女子通信手と「身体」の兵

士化」(『週聞読書人』三四七四号、二〇二三年、三頁)

澁谷 浩一(しづや こういち) 人文社会科学部教授

昭和三九年(一九六四)／北海道大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学／文学修士／中央ユーラシア史、露清関係史

・「十八世紀前半の清とジュンガルの講和交渉再論―交渉の形式と清側の交渉姿勢を中心に―」(茨城大学人文社会科学部紀要『人文コミュニケーション』シヨシヨ論集』第七号、二〇二二年、八七―一〇七頁)

清水 恵美子(しみず えみこ) 全学教育機構准教授

昭和三七七年(一九六二)／お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了／博士(学術)／比較文学比較文化・美術史

・「岡倉天心と国際文化交流 討論」(『国際交流と日本―日本の自画像と国際認識を作った国際交流』、内外出版株式会社、二〇二二年、一一六―一二七頁)

・「岡倉天心消息の紹介(2)」(『江戸千家便覧 ひと、き草』一三八号、江戸千家連合不白会、二〇二二年、二〇―二二頁)

・「岡倉天心消息の紹介(3)―森田思軒宛―」(『江戸千家便覧 ひと、き草』一三九号、二〇二二年、二八―二九頁)

・「岡倉天心消息の紹介(4)―黒川真頼宛―」(『江戸千家便覧 ひと、き草』一四〇号、二〇二二年、三〇―三二頁)

・「天心紀行(1)―旅に出る前に―」(『江戸千家便覧 ひと、き草』一四二号、二〇二三年、四〇―四二頁)

・「岡倉兄弟が説いた『茶』の真髄」(『アートコレクターズ』一七〇号、生活の友社、二〇二三年、四二―四三頁)

添田 仁(そえた ひとし) 人文社会科学部教授

昭和五一年(一九七六)／神戸大学大学院文学研究科(博士課程)修了／博士(学術)／歴史学(日本近世史)

・「抜荷」(青木歳幸ら編『洋学史研究事典』、思文閣出版、二〇二二年)

・「茨城における水損資料の保全活動―令和元年東日本台風への対応を中心に―」(共著、『歴史評論』八五八、二〇二二年、七九―八八頁)

・「学生が取り組む地域歴史遺産の保全と活用」(木部暢子編『地域文化の可能性』、勉誠出版、二〇二二年、九三―一三三頁)

・「小津久足の文事と徳川光圀―右文の時代の水戸藩―」(『五浦論叢』二九、二〇二三年、八八―一六六頁)

・「常陸大宮市史資料叢書1 近世1 上伊勢畑村御用留」(共編著、常陸大宮市教育委員会、二〇二三年)

・「旅人たちが観た水戸藩―旅日記・名所絵を読む―」(共編著、茨城大学人文社会科学部、二〇二三年)

高橋 修(たかはし おさむ) 人文社会科学部教授

昭和三九年(一九六四)／神戸大学大学院文学研究科博士後期課程中退／博士(文学)／歴史学(日本中世史)

・「内海世界の将門と貞盛」(『地方史研究』四一三、二〇二二、四一―三三頁)

・「戦う茂木一族 中世を生き抜いた東国武士」(編著、高志書院、二〇二二年、全一四三頁、七一―二七頁執筆)

・「常陸大宮市史」資料編二 古代・中世(共著、常陸大宮市史編さん委員会、全八五七頁)

田中 裕(たなか ゆたか) 人文社会科学部教授

昭和四三年(一九六八)／筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科(退学)／博士(文学)／考古学・博物館論・文化財論

- ・『古代国家形成期の社会と交通』（同成社、二〇二三年）。
- ・『常陸国「建評」前後の古墳研究』（茨城大学人文社会科学部考古学研究室、二〇二三年）。
- ・『柏市史 沼南通史 通史編』（柏市、二〇二三年）。
- ・『古代の鈴と鈴飾りの歴史的意義』『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』（六一書房、二〇二三年）。
- ・『房総の後期前方後円墳からみた首長権と金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』（六一書房、二〇二二年）。
- 千葉 真由美（ちば まゆみ） 教育学部教授
- 昭和四六年（一九七二）／東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科単位取得満期退学／博士（学術）／歴史学（日本近世史、村落史）
- ・『歴史教育における数学的知識の活用2―制作要具を使用した検地の実践から―』（単著、『茨城大学教育実践研究』第40号、二〇二二年、一一―二三頁）
- ・『総合的な学習の時間における昔話の活用―教科を横断した総合的な学習の時間の実現にむけて―』（共著、『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』第七号、二〇二二年、四七―五九頁）
- ・『江戸の百姓と印』（単著、『日本歴史』第八八四号、二〇二二年、五八―六五頁）
- ・『近世多摩地域の百姓と江戸出府』（単著、『町田市立自由民権資料館紀要』第三五号、二〇二二年、六四―七九頁）
- ・『女性の役割―子育てと介護は女性の役割か―』（単著、岩城卓二ほか編『論点・日本史学』、ミネルヴァ書房、二〇二二年、二〇八―二〇九頁）
- ・『江戸の公事宿と村―下総屋文蔵と下総国豊田郡加養村稲葉家の事例から―』（単著、『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）』第七二号、二〇二三年、一一―八頁）

- 西野 由希子（にし の ゆきこ） 人文社会科学部教授、地球・地域環境共創機構（GIEC）人間・社会経済部門長
- 昭和四〇年（一九六五）／お茶の水女子大学大学院博士課程（単位取得退学）／修士（文学）／中国文学・香港文学、地域研究
- ・『大学との連携による常陸大宮市の「森を活かしたまちづくり」』（『建築とまちづくり』二〇二二年四月号、新建築家技術者集団、二〇二二年四月、二八―三二頁）
- ・『中国で制作される「連続ドラマ」―『陳情令』と『古装劇』』（『茨城大学人文社会科学部紀要 人文社会科学論集』、茨城大学人文社会科学部、二〇二三年二月、六三―七四頁）
- ・『香港作家・也斯の「対話」による創作活動』（『文学の力、語りの挑戦 中国現代文学論集』、宮尾正樹教授退休記念論集刊行会、東方書店、二〇二二年三月、二四九―二六九頁）
- ・『茨城大学―日立製作所連携プロジェクト 地域デザイン』、特色研究加速イニシアティブ、二〇二二―二〇二三年）
- ・茨城県公益認定等審議会委員
- ・茨城文学賞選考委員
- ・つくば市R8地域会議アドバイザー
- ・常陸大宮市市史編さん審議会副会長
- 藤原 貞朗（ふじはら さだお） 副所長・人文社会科学部教授
- 昭和四二年（一九六七）／大阪大学大学院文学研究科博士課程退学／修士（文学）／美学・美術史
- ・『共和国の美術 フランス美術史編纂と保守／学芸員の時代』（名古屋大学出版会、二〇二三年二月）
- ・（共同編集）ジャポニスム学会編（高木陽子・村井則子・高馬京子・藤原貞朗編集）『ジャポニスムを考える 日本文化表象をめぐる他者と自己』（思文

- 閣出版、二〇二二年四月)
- ・「パンテアイスレイ事件から『想像の美術館』へ アジア考古学史のなかの アンドレ・マルロー」(永井敦子ほか編『アンドレ・マルローと現代 ポストヒューマニズム時代の〈希望〉の再生』、上智大学出版、二〇二一年、一一八―一三八頁)
  - ・ジャン・カリエスと芸術的な炔器の誕生」(『ふらんす』、白水社、二〇二一年一月、一五一―一九頁)
  - ・「陶芸と『放浪の画家』のイメージ」(山下浩監修、『山下清 別冊太陽日本のこころ201』、平凡社、二〇二二年、一〇八―一一三頁)
  - ・「幻想の中世」と近代の日仏文化交流 中世美術史家と東洋学者のネットワーク」(『日仏文化』九一号、日仏会館、二〇二二年三月、六九―七九頁)
  - ・「戦後の三つのキャッチフレーズからみる山下清の再評価」(『生誕百年 山下清展 百年目の大回想』、展覧会カタログ、SOMPO美術館など、二〇二二年三月、二〇〇―二〇四頁)
  - ・「ルネ・ユイグと共和国の美術史編纂 モダニズム終焉の認識とネオ・ユマニスム」(『日仏美術学会会報』第四一号、日仏美術学会、二〇二二年発行、九二頁)
  - ・FUJIHARA Sadao, «De l'Affaire Banteay Srei au Musée imaginaire. André Malraux dans le contexte de l'archéologie asiatique entre les deux guerres», in HATA (Ayako), NAGAI (Atsuko), YOSHIMURA (Kazunaki), YOSHIZAWA (Hideki) (dir.), *Malraux vu du Japon. Roman, essai et arts*, Edition Classiques Garnier, Paris, pp. 81-97.
  - ・「五浦美術文化研究所の創設と草創期の活動をめぐって」『五浦論叢』二十九号、茨城大学五浦美術文化研究所、二〇二二年。
  - ・FUJIHARA Sadao, "Book Review: Michael Falser, *Angkor Wat: A Transcultural History of Heritage. Volume 1. Angkor in France; Angkor Wat: A Transcultural History of Heritage, Volume 2 Angkor in Cambodia*., Boston: De Gruyter Art &
- Architecture, 2019", *Southeast Asian Studies*, Vol. 12, No. 1, April 2023, pp. 206-210.
- ・(講演)「二〇世紀アンコール遺跡の考古学とフランス東洋学者」(広州美術大学、二〇二二年九月二四日、オンライン)
  - ・(講演)「二〇世紀アンコール遺跡の考古学とフランス東洋学者(二)」(北京中央美術研究所、二〇二二年十月二二日、オンライン)
  - ・(司会とコーディネーター) ジャポニスム学会国際シンポジウム「ジャポニスムと東洋思想」(ジャポニスム学会、オンライン、二〇二二年二月四日)
  - ・(司会とコーディネーター) ジャポニスム学会国際シンポジウム「デザインとジャポニスム」(ジャポニスム学会、オンライン、二〇二二年一月二二日)
  - ・「新訂増補版後記」(森田義之・小泉晋弥編『新訂増補 岡倉天心と五浦』、中央公論美術出版、二〇二二年、三三―三三四頁)
  - ・「昔の六角堂とこれからの研究所」(『てんしん』第二号、五浦日本美術院 岡倉天心偉績顕彰会、二〇二二年、一頁)
  - ・「ワークショップ趣旨説明 一九三〇年周辺のポストモダンとネオ・ユマニスムの文芸史観」(『日仏美術学会会報』第四一号、日仏美術学会、二〇二二年発行、九一頁)
- 堀口 育男 (ほりぐち いくお) 人文社会科学部教授  
昭和三六年(一九六一)／東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学／文学修士／日本古典文学
- ・『鍼盲録』注解―齋藤竹堂の常陸・房総紀行―(太平書屋、令和三年七月)
  - ・『墨水四時雑詠\*注解』(共著) (太平書屋、令和三年九月)
  - ・『甘溪百絶』(愛靜書屋、令和三年十一月)

## 【客員所員紹介】

網谷 厚子（あみたに あつこ） 沖縄工業高等専門学校名誉教授

昭和二十九年（一九五四）／お茶の水女子大学大学院人間研究科（博士課程）

単位取得満期退学／文学修士／中古文学、国語教育、韻文学

・『万籟』（思潮社、二〇二二年） 二〇二二年茨城新聞社賞受賞

・『日本語の多様な表記・表現』（『白亜紀』第一六一号、二〇二二年、二二一～二五頁）

・『日本語の音』（『白亜紀』第一六三号、二〇二二年、二二一～二五頁、四四～四七頁）

・『声』の詩（『白亜紀』第一六四号、二〇二二年、二二一～二五頁）

・『口承』という豊饒の海（『白亜紀』第一六二号、二〇二二年、二二一～二五頁）

・『女流詩人の草分け―英美子の詩について』（『茨城文学』第四八号、二〇二二年、二五～三〇頁）

・『触覚』を刺激する―大岡信「さわる」』（『万河・Baiga』第二八号、二〇二二年、二二～二三頁）

金子 一夫（かねこ かずお） 茨城大学教育学部名誉教授

昭和二十五年（一九五〇）／東京藝術大学大学院美術研究科修了（美術教育学専攻）／博士／美術教育学

・『贈与交換システム論的美術教育学の交換と教材の層的構造―言語記号論

的・時間論的考察―』（『美術教育学』、第四十三号、二〇二二年、八五～九六頁）

・『子どもの論理による美術教育思想の研究 1―長期連載・西野範夫「子どもがつくる学校と教育」の検討―』（『美術教育学研究』、第五十四号、二〇二二年、七三～八〇頁）

・『有田洋子との共著』 絵本の美術的本質と美術教育的意義としての場面転換』（『美術教育学研究』、第五十四号、二〇二二年、九一～一六頁）

・『安岡信義と近代日本中等学校美術教育―東京美術学校図画師範科と富山県美術教育を中心に―』友岡真秀編『安岡信義1888―1933―近代洋画の黎明期を生きた画家』鳥取県立博物館、二〇二三年、九一～一五頁。

・『贈与交換システム論的美術教育学における純粋贈与―純粋贈与と無・無意識・自己表出―』（『美術教育学』、第四十四号、二〇二三年、一一三～一二四頁）

・『子どもの論理による美術教育思想の研究 2―西野範夫の教科調査官就任前の美術教育思想―』（『美術教育学研究』、第五十五号、二〇二三年、八一～八八頁）

小泉 晋弥（こいずみ しんや） 茨城県天心記念五浦美術館館長

昭和二十八年（一九五三）／東京藝術大学大学院美術研究科修了／修士（美術教育学）／近現代美術史・博物館学

・『足跡』「飯村丈三郎の美術理解と岡倉天心の美学」（『茨城近代化の父飯村丈三郎の生涯』茨城新聞社、二〇二二年、四〇～四五頁、四八～五三頁、五六～五七頁、六〇～六一頁、七〇～七一頁、一〇五～一〇八頁）

・『高田啓二郎2021』（『高田啓二郎画文集Kの劇場』求龍堂、二〇二二年、一九〇～一九五頁）

・『伊藤公象のインスタレーションの思想』（『ITO Kohsho 伊藤公象作品集』ときのわすれもの、二〇二二年、一二五～一四四頁）

・『齋藤隆三と飯村丈三郎と五浦日本美術院―明治の夢の織物』（『日本美術院の立役者 齋藤隆三展』茨城県天心記念五浦美術館、二〇二二年、一一七～一二三頁）

・『寄興雲烟―いつでも、どんなところでも 山本正道《追憶》をめぐる断章』（『東京藝大芸学科 同窓随想集 acandus アカンス』第一号、

二〇二二年、三〇～三九頁)

後藤 道雄(ごとう みちお) 美術史学会

昭和八年(一九三三)／國学院大学文学部史学科中退／仏教美術史

・『茨城彫刻史研究』(中央公論美術出版、二〇二二)

・『常陸の仏像』(『国華』一二三六号、国華社、二〇〇六年)

・国際日本文化研究センター共同研究「差別から見た日本宗教史再考」研究発表(二〇一八年十一月十七日)

・『律宗と親鸞系諸門流の聖徳太子信仰』(吉田一彦と共著)(磯前純一他編『差別と宗教の日本史』法蔵館、二〇二二)

佐々木 寛司(ささき ひろし) 茨城大学名誉教授

昭和二四年(一九四九)／学習院大学大学院博士課程満期退学／文学博士(九州大学)／日本近代史

・『戦後思想史のなかの歴史学』(『明治維新史研究』第二二号、二〇二二年五月)

・『和光市史 平成版』監修、和光市、二〇二三年三月)

佐藤 道信(さとう どうしん) 東京藝術大学美術学部教授

昭和三二年(一九五七)／東北大学文学部大学院修士課程／修士／近代日本美術史

・『日本美術』誕生 近代日本の「ことば」と戦略』(復刻)(ちくま学芸文庫、筑摩書房、二〇二二年)

・『平成の日本美術院―悠久々のゆくえ』(『平成の日本画 一九八九―二〇一九日本画と水墨画三十年の軌跡』美術年鑑社、二〇二二年、十五―十八頁)

・『明治彫刻史の中の長沼守敬』(『近代彫刻の先駆者長沼守敬―史料と研究』

中央公論美術出版、二〇二二年、六四―六五二頁)

・『東京美術学校の美術教育―作家養成か教員養成か』(『近代洋画の黎明期を生きた画家 安岡信義 一八八八―一九三三』展図録、鳥取県立博物館、二〇二三年二月、六―八頁)

菅谷 務(すがや つとむ)

昭和二五年(一九五〇)／明治大学大学院政治経済学研究科博士課程単位取得退学／政治学修士／日本政治思想史

・『橋川文三の「死に損いの原理」と「歴史意識」の形成について―Y・パトチカの「前線」、E・レヴィナスの「顔」との比較において―(上)』(『五浦論叢』(茨城大学五浦美術文化研究所紀要)二八号、二〇二二年)

・『橋川文三の「死に損いの原理」と「歴史意識」の形成について―Y・パトチカの「前線」、E・レヴィナスの「顔」との比較において―(下)』(同右、二九号、二〇二二年)

・『歴史認識と「死者」のことば(その二)―太平洋戦争における戦没学徒の「居場所」とそこからの「声」をめぐる―』(『歴史文化研究』(茨城)第九号、歴史文化研究会、二〇二二年七月)

鈴木 暎一(すずき えいいち) 茨城大学名誉教授

昭和一四年(一九三九)／東京大学大学院人文科学研究科修士課程国史学専攻修了／文学博士／日本近世史

・『往復書案―にみる塙保己一とその周辺―』(『大日本史』編纂過程の一面)』(『茨城史林』四五号、二〇二二年六月)

・『徳川光圀と遣迎院応空補遺』(『茨城史林』四六号、二〇二二年六月)

鶴岡 和幸(つるま かずゆき) 学習院大学文学部教授

昭和二五年(一九五〇)／東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得



退学／博士（文学）／中国古代史

・『始皇帝の地下宮殿―隠された埋蔵品の真相―』（山川出版社、二〇二二年）

・『新説始皇帝学』（カンゼン、二〇二二年）

・『始皇帝の愛読書―帝王を支えた書物の変遷―』（山川出版社、二〇二三年）

・『秦漢人物史研究と『風俗通義』姓氏篇』（『東方学』一四三、二〇二二年、一―三五頁）

・『始皇帝の時代の名もなき人々』（『日本秦漢史研究』第三号、二〇二二年、九六―一二九頁）

中村 愿（なかもら すなお） 蘭花堂主人

昭和二十二年（一九四七）／小倉工業高校／中国古代史・文学・日本近代美術史

・『三国志逍遙』（山川出版社、二〇二〇年）

・『魯迅の言葉』（監訳、平凡社、二〇二一年）

・『史記と日本人』（共著、平凡社、二〇二一年）

・『岡倉天心アルバム』（改訂版、中央公論美術出版、二〇一三年）

・『狩野芳崖 受胎観音への軌跡』（山川出版社、二〇一三年）

・『私の夢十夜』（前後篇）平凡社『こころ』二四・二五号（二〇一五年）筆名・尾鷲卓彦

・『ドレイ日記』平凡社『こころ』三三三号（二〇一六年）筆名・尾鷲卓彦

・『秘母観音の女・初子と覚三』天心報 第一六号（二〇一七年・講演記録）

深澤 安博（ふかざわ やすひろ） 茨城大学名誉教授

昭和二十四年（一九四九）／東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程単位

修得退学／文学修士／ヨーロッパ現代史

・『帝国主義（植民地戦争）』（『社会経済史学事典』丸善出版、二〇二二年、五七八―五七九頁）

・『第42回大会参加記』（『スペイン史学会会報』第一二七号、二〇二二年、二三―二五頁）

藤本 陽子（ふじもと ようこ）

昭和二十三年（一九四八）／國學院大学文学部史学科／日本近代美術史

・『茨城県近代美術館―日本画コレクションの形成』（『美連協二五周年記念日本美術館名品展図録』、美術館連絡協議会、二〇一〇年）

・『横山大観 生々流転』（『國華一四〇〇号記念号』國華社、二〇二二年）

森田 義之（もりた よしゆき） 愛知県立芸術大学名誉教授

昭和二十三年（一九四八）／東京藝術大学大学院美術研究科修了（西洋美術史専攻）／芸術学修士／イタリア中世近世美術史

・ジョルジョ・ヴァザリ『美術家列伝』第二卷（共同監修）、中央公論美術出版。「アントネッロ・ダ・メッシーナ伝」、「ドナテッロ伝」、「ボッティチェッリ伝」、「フィリッポ・リッピ伝」、「ギルランダイオ伝」他、14伝記を担当。

・ジョルジョ・ヴァザリ『美術家列伝』第六卷（共同監修）、中央公論美術出版。「ミケランジェロ伝」、「ヴァザリ自伝」の翻訳、及び解説論文「ジョルジョ・ヴァザリとその『美術家列伝』を担当」。

二〇二二年度 茨城大学五浦美術文化研究所 主要活動報告

片 口 直 樹

## はじめに

茨城大学五浦美術文化研究所（以下、研究所）の主な活動を報告する。令和四年度は、前年度に引き続き、コロナ禍の影響が色濃く残る一年であった。事業の縮小が余儀なくされ、研究所としての活動が制限される状態が続いていたと言える。そのような状況においても、研究所の運営に尽力した所員や職員、管理人の皆様には感謝申し上げます。

研究所では、主な活動方針として①「天心遺跡及び収蔵資料の保守管理と調査研究」、②「地域連携事業」を掲げている。当初の計画を変更せざるを得ない状況もあったが、ほぼ予定通りの事業を実施し、無事に一年を終えることができた。これは、客員所員の皆様をはじめ、地域の皆様のご協力なしには成し得なかつたことである。この場をお借りして感謝申し上げますとともに、今後も研究所を温かく見守っていただきたいと、切に願うところである。

以下、研究所の諸活動の内容を報告する。

## 活動報告

## 一 天心遺跡及び収蔵資料の保守管理と調査研究

## (一) 遺跡保守管理、収蔵品の持続的保守管理

研究所は、岡倉天心関係の遺跡等の資産の十全な保全の上に存立している。遺跡の保全策としては、日常的な維持管理と長期的な視野に

立つた大規模な整備である。

日常的管理としては、例年通り、研究所内清掃作業・浄化槽保全業務・消防整備保全業務・松くい虫防除作業・研究所内植栽工事・天心邸前庭園及び芝生保全業務・休憩室の整備整頓などを行った。

整備事業としては、老朽化や破損等のため、天心邸の外壁補修、六角堂階段通路の擁壁及びため池脇のロープ柵の補修、六角堂通路脇コンクリート柵の設置を行った。また、長屋門内の流し台取り換え工事、管理室内の蛍光灯修理、天心記念館内の整備（『五浦釣人』前の柵の設置等）も行った。

研究所は太平洋に面した立地であり、日々海風にさらされた環境にある。老朽化や破損が免れない状況にあるため、遺跡の保守管理のみならず、来場者の皆様の安全のためにも、次年度以降も継続的に整備にあたる必要がある。

## (二) 研究所主催事業「所員企画展」の開催

これまで、天心遺跡に関連する収蔵作品等を紹介することを目的とした「収蔵品展覧会」を実施していたが、二〇二二年度より新たな試みとして「所員企画展」を開催することとした。研究所の所員は様々な分野で活躍する研究者が集っており、それらの各専門分野を生かした展示を企画することで、広く芸術・文化を対象とした研究所及び所員の研究成果を訴求したいと考える。第一弾として、教育学部教授の齋木久美所員を中心に企画した展覧会を開催した。内容は、小川芋銭や高村光太郎などの書簡などを展示し、手紙を「見る」ことで、書き手の「そのひとらしさ」を体験し、「読まない」鑑賞を楽しむもの

である。本展では五浦ゆかりの横山大観や木村武山などの書簡も展示し、手紙がつなぐ人と人の関わりを創出していた。展示の記録は小冊子としてまとめており、研究所等で配布している。

事業名…茨城大学五浦美術文化研究所所員企画展二〇二二

『つなぐ人つなぐ文―手紙に「見る」そのひとらしさ―』

会場…茨城大学図書館本館一階展示室

会期…令和四年一月八日(火)～二月二日(月)

講演1…「小川芋銭の芸術」小泉晋弥氏

(茨城大学名誉教授・美術評論家)

講演2…「光太郎と宮崎稔」安裕明氏(茨城県立多賀高等学校講師)

共催…茨城大学図書館

### (三) 研究成果の公開

令和四年二月に『五浦論叢』第二十九号を刊行し、茨城大学学術情報リポジトリROSEにて公開している。刊行に向け、執筆者の皆様、印刷会社の皆様には多くのご協力を賜った。この場をお借りして御礼申し上げる。なお、今後の持続可能な刊行を目的とし、新たに『五浦論叢』編纂委員会を組織した。

### (四) 五浦六角堂三次元点群データの贈呈

令和二年度に「茨城土地家屋調査士会七〇周年記念プロジェクト」として、六角堂の登記登録及び3Dモデリングデータの作成が行われた。この度、コロナ禍の影響により延期となっていたデータ贈呈式が令和四年一月一四日に実施された。この場をお借りして、茨城土地

家屋調査士会の会長様はじめご参列いただいた皆様にご挨拶申し上げます。式の様子は新聞等のメディアやYoutube等で紹介された。また、上記所員企画展等においても「五浦六角堂三次元点群データ」を元にした六角堂の紹介映像を公開した。

## 二 地域連携事業

### (一) 研究所主催事業「観月会」の開催

研究所主催の恒例事業である「観月会」では、これまで茶会や講演会、展覧会等を実施してきた。しかし、コロナ禍に突入以降、事業の開催に制限が余儀なくされ、前年度同様に今年度も展覧会のみで開催となった。茨城県ゆかりの美術作家である綿引明浩氏を作家として迎え、研究所を舞台とした展覧会と、茨城県天心記念五浦美術館を会場とする小学生向けのワークショップを開催した。ワークショップでは、作家オリジナルの絵画技法である「クリアグラフィ」を体験することができ、参加者は綿引作品の根幹を味わうことができたであろう。展示の記録は小冊子としてまとめており、研究所等で配布している。

事業名…「観月会二〇二二 綿引明浩展「透明な絵画」」

会場…茨城大学五浦美術文化研究所(天心遺跡)

会期…令和四年一月一日(火)～二〇日(日)

掲載…『月刊みと11月号』(編集・発行 株式会社ふじ工房)

企画名…『綿引明浩のワークショップ』

『透明な絵画・クリアグラフィ』

会場…茨城県天心記念五浦美術館講座室

日 時：令和四年二月五日（土）午後一時三〇分～午後三時  
共 催：茨城県天心記念五浦美術館

（二）研究所共催事業

「人文社会科学部地域史シンポジウム」への参加

前年度同様、所員の多くが企画・運営に関わる本学人文社会科学部主催事業を共催した。シンポジウムの最後には、事業開催及び成功に對する所長挨拶を行った。

事業名：第17回茨城大学人文社会科学部地域史シンポジウム

『北関東の豪族たちⅡ―「長者」たちの萌芽と基盤―』

会 場：茨城大学講堂

日 時：令和五年二月一日（土）一二時三〇分～一七時

主 催：茨城大学人文社会科学部

後 援：茨城大学考古学研究会

（三）天心遺跡記念公園及び墓地保護管理委員会への参加

（於：北茨城市役所）

公益財団法人日本ナショナルトラストが主催する第一五回天心遺跡公園及び墓地保護管理委員会（於：北茨城市役所三階協議室）にオブザーバーとして所長が参加した。参加団体の令和三年度における実績と令和四年度の主な動向を共有し、様々な課題に対する協議を行った。次年度以降は所長が委員として参加する予定である。

（四）「天心サミット」への参加

五浦日本美術院岡倉天心偉績顕彰会主催の事業「天心サミット」が中止となったため、次年度の開催に向けて協議を行った。令和五年度的における事業の開催では、研究所から副所長が講演会講師として参加することとなった。また、その際に使用する映像製作に取り掛かることとなった。他にも、「観月会 特別展示」を開催することとなった。

三 その他

令和四年度 茨城大学五浦美術文化研究所 美術館などへの出品依頼

No.	作 品	貸出期間	貸 出 先	備 考
1	活人箭	令和4年9月1日～ 令和4年12月16日	小平市平櫛田中彫刻美術館	小平市制施行60周年事業「生誕150年平櫛田中展」に出展するため
2	The book of tea, The Ideals of the East, The awakening of Japan, 扇面漢詩	令和4年6月25日～ 令和4年11月7日	ワタリウム美術館	ワタリウム美術館「鈴木大拙展」における展示のため

令和四年度 茨城大学五浦美術文化研究所 収蔵品掲載許可（出版・放送等への協力）

No.	作品	内容	承認日	目的	依頼先
11	六角堂	画像データ	7月20日	CREA WEBで運営する、日本全国の四季折々の絶景スポットを紹介する「いつか行きたい! 『日本にしかない風景』再発見」において、茨城県のスポットのなかで五浦海岸を紹介するため	CREA
10	六角堂	画像データ	7月19日	静岡市三保松原文化創造センター企画展「全国の身近な松原展」において、五浦海岸の景観を紹介するにあたり、五浦六角堂の写真を展示するため	静岡市三保松原文化創造センター
9	六角堂	画像データ	7月19日	「うぐいす谷温泉 竹の葉」の公式HPリニューアルに向けて、周辺観光案内ページに〈六角堂〉を掲載するため	株式会社いしい
8	六角堂	映像	6月30日	も撮影するため	福島テレビ
7	六角堂	画像データ	6月24日	CREA WEBの記事に五浦六角堂の写真を掲載するため	茨城県庁観光物産課
6	六角堂 天心邸	画像データ	6月24日	茨城新聞社発行 あいちやつと8月号 巻頭特集「茨城の庭園」掲載のため	月刊みと
5	六角堂	画像データ	6月3日	SNSの運用目的で、海外ユーザーが訪日が可能になった際に訪問を検討いただけるように各地のスポット紹介をするため	INTO
4	六角堂	画像データ	5月19日	経済新聞茨城版の広告欄「伸びゆく 北茨城市」に五浦六角堂の写真を掲載するため	北茨城市商工観光課
3	六角堂 他	画像データ	4月27日	5月22日（日）放送「朝だよ! ハピネスふくい」で岡倉天心を紹介し、その際、画像を使用するため	福井放送 制作部
2	六角堂	画像データ	4月22日	国内観光情報サイト「getcity（キャッチー）」において、国内旅行の魅力や、国内の観光スポットなど国内旅行を楽しむための国内観光情報を掲載し運用するため	株式会社 エイチ・アイ・エス
1	六角堂	画像データ	4月13日	機関誌において、企業の魅力を見せつつ、周辺の施設の紹介をすることで観光誘致と、地域のさらなる活性化のため	株式会社 ジマンニ

20	19	18	17	16	15	14	13	12
六角堂	六角堂等	六角堂	六角堂	六角堂	六角堂	六角堂	六角堂 三猿図 和55年盗難、秋景、 年の写真、海嶽(昭 術館)、横山大観晚 真(於ポストン美 真、岡倉天心の写 真、木村武山晩年 写真、日本美術院 五浦時代の作画場 面、下村観山の写 真、岡倉天心の写 真(於ポストン美 術館)、横山大観晚 年の写真、海嶽(昭 和55年盗難)、秋景、 三猿図	六角堂修理に關し ての資料、五浦即 時、菱田春草の写 真、木村武山晩年 写真、日本美術院 五浦時代の作画場 面、下村観山の写 真、岡倉天心の写 真、岡倉天心の写 真(於ポストン美 術館)、横山大観晚 年の写真、海嶽(昭 和55年盗難)、秋景、 三猿図
画像データ	イラスト	画像データ	画像データ	画像データ	画像データ	画像データ	画像データ	画像データ
9月28日	9月28日	9月28日	9月9日	9月9日	8月30日	8月25日	8月2日	7月28日
J Rグループ会社主催のツアーの募集媒体(チラシ・ホームページ)に記載するため	J R東日本「大人の休日倶楽部」12月号掲載のため	茨城県国際観光課からの受託事業において、運営するWebサイト茨城県周遊観光情報を掲載した記事作成特集テーマにおいて県内観光情報を紹介するため	2023年版カレンダーを作成にあたり、「六角堂」を掲載するため(茨城県内の景色や県産品の画像の中で六角堂も掲載する)	栃木県の県政広報誌「とちぎ県民だより」11月号にて六角堂の写真に掲載するため	J R四国・J R九州)が共同で運営するシニア向け旅行会員組織の会員誌『ジパング倶楽部』11月号で、「六角堂」を紹介するため	絶景茨城カレンダー2023の制作で、6月の北茨城市の五浦海岸風景画像として六角堂を使用するため	つくば美術館にて文化レスキューの重要性を理解、普及を目的とした展示会(8/16-21)を開催する。その際、日本美術の総本山である六角堂修復の様子をパネルにて展示するため	J R東日本水戸支社の企画「駅からハイキング」のパンフレットチラシに五浦六角堂の写真に掲載するため
J R水戸支社	大人の休日倶楽部	WAmazing	東京ガスネットワーク株式会社 日立支店	茨城県観光物産課	株式会社交通新聞社 ジパング倶楽部編集部	茨城県観光物産協会	オール・パレ展 実行委員会	J R東日本 水戸支社

31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
六角堂	横山大観が描いた五浦の大観邸の平面図	六角堂天心邸長屋門からの小道	六角堂	六角堂・天心邸	六角堂他	六角堂	六角堂	六角堂	六角堂	六角堂
画像データ	画像データ	画像データ	画像データ	撮影写真	撮影写真	画像データ	観光いばらきフォトダウンロード写真	観光いばらきフォトダウンロード写真	観光いばらきフォトダウンロード写真	画像データ
受理	1月19日	3月7日	11月28日	11月15日	11月11日	11月9日	10月31日	10月27日	10月19日	10月13日
北茨城市・高萩市・いわき市合同企画「常磐3市サイクリングスタンプラリー」に六角堂の写真を掲載するため	1/31(火)放送の「ぶらぶら美術・博物館」にて、上野の横山大観記念館取材し、横山大観が住んできた五浦の大観邸について触れる際、五浦の大観邸の平面図の写真を掲載するため	北茨城市文化財マップに掲載するため	岡倉天心の思想などについて研究を行っており、自費出版をするにあたり写真を使用したいため	BS朝日の番組「子供たちに残したい美しい日本のうたSP」にて野口雨情を紹介。故郷の北茨城市の魅力も紹介するため、代表する風景のひとつとして六角堂・天心邸の紹介もするため。	り旅」12/25発行) 茨城県社会福祉協議会発行の「わくわくライフいばらき冬号」における取材のため(*掲載コーナー「まちあるき日帰り旅」12/25発行)	全国市長会機関紙「市政」における「マイ・プライベート・タイム」の記事に五浦六角堂の写真を掲載するため	NHK番組「ロコだけが知っている」において、茨城県の観光地・グルメの魅力を取り上げる。その中で、北茨城の五浦海岸の絶景を紹介するため	茨城県庁友の会設立50周年記念特集号を作成にあたり、特集号の裏表紙に県内6支部を代表する名所名跡の写真を掲載するの六角堂も掲載するため	茨城県広報誌「ひばり」11月号にて、県北を代表する場所のイメージとして五浦海岸と六角堂の写真を掲載するため	旅行・お出かけ情報を紹介するウェブサイト「NAVITIME Travel(ナビタイムトラベル)」において、六角堂を紹介するため
北茨城市商工観光課	株式会社東阪企画	北茨城市生涯学習課	土屋 雄二郎	テレビマンユニオン	株式会社 日宣メディアックス	北茨城市	NHKみと	茨城県庁友の会	茨城県営業戦略部営業企画課	有限会社 アナパ・パシフィック



35	34	33	32
六角堂	天心邸 六角堂 長屋門	岡倉天心【五浦即 詩】 横山大観・岡倉天 心【谷中鷺】	東京美術学校初期 制帽
画像データ	撮影写真	画像データ	画像データ
3月28日	3月10日	3月7日	2月14日
道の駅奥久慈たいごに設置予定の茨城県内観光地を案内するマップに六角堂のサイトのQRコードを載せ、お客様がQRコードを読み込み、六角堂についての詳細を確認できるようにするため	株式会社 KINTO 公式 Instagram の茨城県内のおすすすめスポット企画として掲載するため	雑誌「文化展望」内に掲載の美術評論（岡倉天心とフェノロサが日本の歴史上どのように現れてきたのかについて、それぞれの生い立ち・交友関係から解き明かす内容）で使用するため	研究雑誌『國華』（号数未定）に掲載予定の論文「明治期京都の美術学校における日本画教育史」にモノクロ挿図として掲載するため
大子町役場観光商工課	株式会社 KINTO	株式会社フィネス	京都文化博物館

やごうじ

研究所の主な活動について記してきたが、これまでも述べたとおり、いくつかの事業については報告が叶わなかった。観月会における茶会や講演会の開催、五浦日本画塾や岡倉天心セミナーの開催、五浦美術館との共同調査等、十分な取り組みが叶わなかった事業について

は、ポストコロナの状況を鑑み、事業内容を再検討する必要がある。本報告を通して、令和四年度の活動を概観することにより、これから研究所の発展について模索する機会としたい。地域の皆様から愛される研究所を目指し、今後も活動に取り組む所存である。

〔かたぐち なおき／所長・本学教育学部准教授〕

茨城大学五浦美術文化研究所所員企画展二〇二二

つなぐ人つなぐ文―手紙に「見る」そのひとらしさ―報告

齋 木 久 美

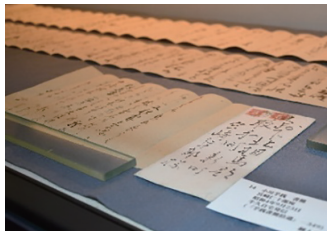
本研究所の所員が各専門分野を生かした展示を企画する「所員企画展」として、小川芋銭や高村光太郎の手紙や書を展示する「つなぐ人つなぐ文―手紙に見る―そのひとらしさ―」を開催しました。

「書は人なり」と言われるように、先人の事蹟をしのび、その書を鑑賞することとは広く行われてきました。郷土茨城でも多くの先人が活躍し、その書蹟は高く評価され現代に伝わっています。

そこで、横山大観、木村武山など五浦ゆかりの画家や、大観が認められた小川芋銭、また茨城にも関わりがあった高村光太郎などの手紙に表れる「そのひとらしさ」に触れ、鑑賞していただくこと企画しました。芋銭が、長く交流した宮崎仁十郎宛に送った手紙は五〇〇通以上にも上ります。仁十郎の息子稔は、智恵子の姪春子と結婚し、長子に光太郎と命名しています。手紙から、当時の交流関係をうかがうことができ、これも手紙に触れる魅力です。

とはいうものの、筆が走り、草書や変体仮名が使われている芋銭らの手紙は、読むことは難しいと思います。しかし、「線」や「書きぶり」を見ることはできます。太さ、細さ、強さ…様々な表現に感じられる「そのひとらしさ」をくみとって、「読まない」鑑賞をしてもよいのではないかと考えました。

展示に合わせて開催した記念講演会では、手紙を通してうかがうことのできる芋銭らの交流の様子も紹介されました。



会期 令和四年十一月八日(火)～二十一日(月)

会場 茨城大学図書館本館一階展示室

記念講演会 令和四年十一月十二日(土)

会場 茨城大学図書館本館ライブラリーホール

小川芋銭の芸術 小泉晋弥氏(茨城大学名誉教授・美術評論家)

光太郎と宮崎稔 安 裕明氏(茨城県立多賀高等学校講師)

感染防止対策のため、外部の方の閲覧は、事前申し込み制となりましたが、五浦ゆかりの人物や芋銭に関心を持つ内外の方が足を運んでくださり、人と人をつなぐ手紙の魅力を再発見してもらえる展示となりました。

ご協力いただいた方々に、この場を借りて御礼申し上げます。

※本企画は、茨城大学ダイバーシティ推進室 令和四年度女性エンパワメント支援 制度の事業として実施しました。

(所員・本学教育学部教授 齋木久美)

茨城大学人文社会科学部地域史シンポジウム

「北関東の豪族たちⅡ―「長者」たちの萌芽と基盤―」  
を開催して

田 中 裕

令和四年度で第一七回を迎えた茨城大学人文社会科学部地域史シンポジウムは、「北関東の豪族たちⅡ」「長者」たちの萌芽と基盤」と題し、茨城大学人文社会科学部的主催、茨城大学五浦美術文化研究所の共催、茨城大学考古学研究会の後援により、令和五年二月一日に、茨城大学講堂において開催された。以下、催事概要、講演・報告・討論内容に分けて、当シンポジウムの成果を報告したい。

### 【催事概要】

新型コロナウイルス感染症対策により、令和二年度は開催中止、令和三年度はオンライン開催となったことから、令和四年度は三年ぶりの対面開催となった。参加者数は一三八名を集め、未だ感染症の影響が色濃い状況下での対面実施再開という手探りの催事としては、盛況であったと評価したい。シンポジウムにあわせて、後援団体である茨城大学考古学研究会では、学生が主体となって、茨城県ひたちなか市三反田古墳群の測量調査成果をポスター発表するとともに、古墳から採集された埴輪についても実物展示を実施して、シンポジウムを盛り上げた。

シンポジウムのテーマ「北関東の豪族たちⅡ」「長者」たちの萌芽と基盤」は以下の趣旨により設定した。すなわち、『常陸国風土記』には「常陸国」が七世紀の孝徳朝以降に置かれ、その成立以前には六つの国造国があったと記されており、地域でも最上層に当たると想定される国造に焦点が当たることが多かった。これに対し、近年、

茨城県ひたちなか市では農業生産に適さない海浜部の断崖上やその斜面に、海の磯石を用いた埋葬施設をもつ特徴的な群集墳が古墳時代後期から終末期（六世紀～七世紀）になって築かれていたことが明らかになり、海の交通を担った水界民（海民・海人集団など）等の職能集団の存在が指摘されている。このような特定職能を想定できる集団の墳墓は、のちの郡司を担う「国造氏」に関わるような地域最大の古墳とは限らず、特定の役割をもつなどして地域の権力や経済を支えることにより一定の権益を握る集団の墳墓とみられる。七世紀中葉以降には、建評（郡）に伴い五十戸（里）編成も行われ、のちの里（郷）長が置かれるが、律令期の文献に見える郡領層（国造氏など）に比べ、史料が少ない里長層の実態はほとんど分かっていない。そこで、今回のシンポジウムでは古墳時代後期から奈良時代にかけての茨城県域にとくに焦点を当て、文献史料からこぼれ落ちていた地域の隠れた実力者たちについて、伝承に語られる「長者」に思いをはせながら、その萌芽や基盤などを考古学的に議論することにした。

なお、本シンポジウムは二〇二二年度文部科学省科学研究費補助金基盤（c）「日本古代における「里長」層の形成過程とその政治的社会的基盤（研究代表者／田中裕）」による研究の一部を活用し実施した。

### 【講演・報告・討論内容】

基調講演者の西川修一氏には、シンポジウムテーマに即し、近年注目を集めている「海」の古墳について」の議論の意義を、大局から講演

していただいた。茨城県ひたちなか市「ひたちなか海浜古墳群」と極めて近似する墳墓が神奈川県三浦半島に存在することから、「海民」による独自の繋がりが存在することを示すとともに、これら「海民」の存在を軽視することで偏った歴史を描きかねない、「穀類」を中心とした歴史観の危険性について、文化人類学的成果も引用しながら解説された。

基調報告者の稲田健一氏には開催趣旨に即し「ひたちなか海浜古墳群と装飾古墳からみた交流」で報告をいただき、「ひたちなか海浜古墳群」の成果及び同市の装飾古墳である虎塚古墳の調査成果を紹介しつつ、海民を通じた繋がりを通して九州との共通性にも言及された。続いて、海老澤稔氏は「七世紀後半の常陸国河内評嶋名里の様相―つくば市熊の山遺跡群と高山古墳群の調査成果から―」と題し、茨城県つくば市島名遺跡群の調査成果に触れつつ、嶋名郷の中心遺跡を舞台に、郷（里・五十戸）を構成した首長と集団を具体的に描いていた。これら基調報告に併せて、茨城大学人文社会科学部生の菅原こすず氏より「古墳時代後期における関東と九州の共通性―地域的特徴をもつ土器に注目して―」と題し、九州と関東との漆仕上げ土器器を通じた類似性が指摘され、同大学院人文社会科学部生の中嶋太氏・稲葉祐真氏より「ひたちなか市三反田古墳群の測量調査―筑波山系植輪の新資料―」と題し、会場での展示内容の口頭説明がなされた。

以上の講演・報告に基づき、筆者がコーディネータを務めた討論では、西川氏、稲田氏、海老澤氏との間で質疑応答を行った。とくに、古墳時代首長の基盤、地域最上位首長層と二番手集団の関係について、

て、それぞれの政治的・社会的基盤を考慮しつつ、

①海を通じた繋がりが（いつ、どこまでの範囲でつながるのか、つながりは維持できるのか）

②磯部、海部などの氏族との関係

③古代氏族にみえる職掌集団と古墳時代の「首長」の関係

④国造制（六世紀に順次敷かれていったとの説が有力）との関係

⑤虎塚古墳・十五郎穴横穴墓群・ひたちなか海浜古墳群の関係

⑥島名遺跡群と筑波国造国との関係（とくに郷家集落と高山古墳群造営主の関係とその役割）

⑦古墳時代に形成された組織（ネットワーク）について奈良時代以降に受け継がれた部分と受け継がれなかった部分はないか

⑧伝承に語られる「長者」につながるかもしれない二番手集団の基盤はなにか

などの論点に沿って議論を行い、時間が少ない中でも考古学の枠にとどまらない地域史をめぐる有意義な討論が交わされたと評価する。

最後に、五浦美術文化研究所片口直樹所長より閉会の辞をいただき、今回のシンポジウム開催の意義を総括していただくとともに、五浦美術文化研究所の活動方針について案内があり、今後の研究所の積極的な研究・教育への関わりが周知された点でも、大いに意義あるシンポジウムになったと考える。

〔たなか ゆたか／所員・本学人文社会科学部教授〕

## 『五浦論叢』 投稿規定

- 一、投稿資格について、所員・客員所員ならびに所員・客員所員が適切と認めた執筆者とする。
- 二、投稿内容は、東西の美術文化に幅広い関心をもち、かつ茨城県の五浦に日本美術院を置いた岡倉天心に因み、日本・東洋・西洋の美術文化に関する研究、および茨城県周辺の地域文化（文学・歴史）に関する研究とする。岡倉天心に関する研究・史料紹介は特に歓迎する。
- 三、投稿原稿は論文・評論（書評、展覧会評、作家紹介等）・史料紹介・翻訳等とし、原則として未発表のものに限る。なお投稿者が同一号に掲載できる本数は原則として同一カテゴリーにつき一本とする。
- 四、投稿希望者は毎年三月末日までに申請し、完成原稿の提出期限は五月末日までとする（期限厳守）。投稿先は、茨城大学社会連携センター事業推進課『五浦論叢』編纂委員会 (izurahensan@nibaraki.ac.jp、郵送の場合は三二〇―八五二二、茨城県水戸市文京二二―一) とする。
- 五、編纂委員会は、投稿原稿の内容に応じて査読を行い、投稿原稿の採否を決定する。
- 六、編纂委員会は、原稿の内容、表現等についての問題点を指摘し、再検討をうながすことができる。
- 七、掲載原稿は茨城大学図書館機関リポジトリにおいて公開され、印刷媒体での出版は行わない。抜刷を必要とする場合は執筆者が希望

の冊数の実費を負担する。

- 八、この規定に記されていない事項については、編纂委員会が判断する。

## 『五浦論叢』 執筆要領

- 一、原稿の提出は、原則としてワープロ印字原稿により、六〇枚（四〇〇字換算）を超えないことを目安とし、CD等にデジタルデータを保存し、添付する。その際、使用機種・ソフトを明記する。
- 二、原稿は原則として縦書きとするが、欧文主体の場合、または必要に応じて、横書きも認める。
- 三、原稿には、横書きによる欧文要旨を付することができる。
- 四、原稿には欧文タイトル、著者の肩書きを添える。
- 五、図版用の写真の掲載許可については、投稿者が自らの責任において、日本における慣行に配慮しつつ、しかるべき手続きをとる。なお、許可に要する費用は投稿者負担とする。

茨城大学五浦美術文化研究所紀要

五浦論叢 第三十号

令和五年十二月二十日 発行

編集・発行 茨城大学五浦美術文化研究所

〒310-8512 水戸市文京二-1-1

天心遺跡 〒319-1703 北茨城市大津町五浦  
七二七-二

印刷 佐藤印刷株式会社

〒310-0043 水戸市松が丘一-三-二三



---

# THE IZURA BULLETIN

No. 30

2023

---

## Contents

Miho SUGA	
A Study on the Human Figures in <i>Ban Dainagon-E</i> .....	1
Moena INOOKA	
Landscape Representation of <i>Hitachimeishozu-byōbu</i> : In Terms of Using Preceding Image Patterns .....	27
Syakuyū SHIOTA	
On the Wall Paintings of the Former Okakura Kakuzō (Tenshin) Residence Study -A Report on a Joint Restoration Project by the Tenshin Memorial Izura Museum of Art and Kei Arai .....	51
Tetsuya MIYATA	
Modern Art History by Torao Miyagawa .....	73
Hidemi TORIUMI	
History and Ethics of Western Painting Conservation, and Conservators' Qualification .....	117
Tsuneo UEDA, Yoshiyuki MORITA and Moriko KOBAYASHI	
Giulio Carlo Argan, <i>Storia dell'arte italiana</i> : Translation (Part 2) .....	139
Yoshiyuki MORITA and Hidemi TORIUMI	
Giulio Carlo Argan, Mario Serio, <i>La creazione dell'Istituto Centrale del Restauro</i> : Translation .....	199
Tadashi YOSHINO and Ayumi UEDA	
Paul Desanges, <i>Élie Faure: regards sur sa vie et sur son œuvre</i> : Translation (Part 3) .....	215
Noriyuki KAI	
Carlo Del Bravo, <i>Alessandro Franchi</i> : Translation and Notes .....	249